

 今後のラインナップ

H・アール・カオス 新作公演 白河直子ソロダンス『エタニティ』
7月1日(金)・2日(土) 売切・3日(日)

第15回AAF戯曲賞受賞記念公演『みちゆぎ』
9月9日(金)・10日(土)・11日(日)・12日(月)

ヴェルテダンス『CORRECTION』
10月14日(金)・15日(土)

パフォーミングアーツ・セレクション
10月18日(火)・19日(水)



ニンフェアール第12回公演

「ReAccord」

リコーダー+アコーディオン+エレクトロニクス

- 2016年6月19日(日) 16:00開演
- 愛知県芸術劇場 小ホール
- 主催: 愛知県芸術劇場、ニンフェアール
- 協力: 名古屋芸術大学音楽学部
- 助成: 平成28年度 文化庁劇場・音楽堂等活性化事業



このコンサートは公益財団法人サントリー芸術財団の推薦コンサートです。

ごあいさつ

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。愛知県芸術劇場では、昨年度から、『ミニセレ (ミニシアターセレクション)』として、当劇場小ホールを会場に、前衛的かつ個性的な選りすぐりの舞台公演をお届けしています。その一つとして今回は、現代音楽の分野において、愛知を拠点に新鮮な視点でのコンサートを精力的に企画・開催している「ニンフェアール」の公演を行います。ほかでは聴けない楽器の組み合わせとプログラム、圧巻される演奏を十分にお楽しみください。

愛知県芸術劇場
丹羽康雄

本日はお忙しい中、ニンフェアール第12回公演にご来場いただき、ありがとうございます。2005年の第1回公演から毎年続けてこられたのも、ご来場くださる皆様、ホール関係者、公演に関わってくださる方々の暖かいご支援の賜物であり、心からお礼申し上げます。

今回の公演では、国際的に活躍されている現代音楽のエキスパートのお二人：ニンフェアール第1回公演で協力して下さったリコーダーの鈴木俊哉さんと、アコーディオンの大田智美さんに関わっていただきました。公演テーマであるReAccordは、RecorderからのRe(=“再び”)と、AccordionからのAccord(=“調和する”)からの造語です。ソロの楽器とエレクトロニクスによる作品、デュオ作品とエレクトロニクスによる新作、エレクトロニクス無しによる作品など、異なった編成により楽器の様々な在り方、可能性を比較しながら聴いていただけます。

昨年、第14回佐治敬三賞を受賞した後の、ニンフェアール企画による新たな音響世界への挑戦をご堪能下さい。

ニンフェアール
伊藤美由紀

Program

1. T.プレストン:《ラミレに基づいて》(16世紀 イギリス)
リコーダーとアコーディオン版
Thomas Preston(-1563) : *Upon ra mi re* (16 C.) for recorder and accordion
 2. 石井眞木:《失われた響きII》(1984)
アコーディオンとテープの為の
Maki Ishii(1936-2003) : *Lost Sounds IIb*(1984) for accordion with tape
 3. 細川俊夫:《鳥たちへの断章IIIb》(1990/97)
グレートバス・リコーダー(ソプラノ・リコーダー)とアコーディオンの為の
Toshio Hosokawa : *Birds Fragments IIIb* (1990/97) for great bass recorder (soprano recorder) and accordion
 4. 伊藤美由紀:《無限のクローズアップ》(2016)
グレートバス・リコーダー(ソプラノ・リコーダー)、アコーディオン、エレクトロニクスの為の(世界初演)
Miyuki Ito : *Close-up of Infinity*(2016) for great bass recorder (soprano recorder) and accordion with electronics (WP)
- 休憩
5. エマヌエーレ・カサーレ:《スタジオ2a》(2000)
バスリコーダー、アコーディオン、テープの為の
Emanuele Casale : *Studio 2a* (2000) for bass recorder and accordion with tape
 6. ソフィア・グバイドゥーリナ:《深き淵より》(1978)
アコーディオンの為の
Sofia Gubaidulina : *De profundis*(1978) for accordion
 7. ソラージュ:《煙をくすべる者達》(14世紀 フランス)
リコーダーとアコーディオン版
Solage : *Fumeux fume par fume* (14 C.) for recorder and accordion
 8. 田中範康:《陰影の時》(2016)
テナール・リコーダー(アルト・リコーダー)、アコーディオン、エレクトロニクスの為の(世界初演)
Noriyasu Tanaka : *Sparkling in the Space VII* (2016) for tenor recorder (alto recorder) and accordion with electronics (WP)

出演：鈴木俊哉(リコーダー) ・ 大田智美(アコーディオン)
Tosiya Suzuki, recorder Tomomi Ota, accordion

1. T.プレストン:《ラミレに基づいて》(16世紀 イギリス)

リコーダーとアコーディオン版

16世紀のイギリスでは、繰り返される音階に旋律をつける方法でしばしば作曲されました。この曲は、ラミレと5度上のラミレ(ミシラ)との交互の繰り返しに旋律がつけられた曲です。こういった繰り返しは、人の手による作曲から離れ、自然の周期や天体の動きを現しているのかもしれませんが。

(鈴木俊哉)

2. 石井眞木:《失われた響きII》(1984)

アコーディオンとテープの為の

《失われた響き》シリーズの6曲目の作品である。《失われた響きII》は、オルガンの為の作品で、今回のIIbは、アコーディオンとテープの為の作品である。《失われた響き》という名前は、全シリーズを通して繋がる『無限旋律』を生み出すという試みからである。楽器の個性的な特徴を失わずに、ライトモチーフのようなものを持ち続ける。この作品では、ユニークな特徴あるアコーディオンの音を構築していく。テーマの役割をなす無限旋律が、テープパートの拡張された形式のなかで繰り返される。追憶を暗示しつつ、慎重に失われた響きに近づいていく。(日本語訳:伊藤美由紀)

◆石井 眞木(1936-2003):国立ベルリン音楽大学作曲科で、ボリス・プラッハー、ヨーゼフ・ルーファーらに師事した。声明、雅楽、日本太鼓、ガムラン音楽など、日本の伝統音楽、アジアの音楽の影響による作品を多数残している。

3. 細川俊夫:《鳥たちへの断章IIIb》(1990/97)

グレートバス・リコーダー(ソプラノ・リコーダー)とアコーディオンの為の

「鳥たちへの断章」シリーズは、ギャラリー・TOMとの出会いによって啓発され、創られた一連の作品である。ギャラリー・TOMは、盲人のためのタッチミュージアムである。盲人たちは、彫刻に触れることによって作品を味わう。「視覚」のみが独走してしまった近代世界では、忘れ去られてしまっ

た「触覚」をもう一度考えさせられる実験が、この美術館では進行している。私をとりわけ感動させたのは、TOMに展示してある、日本の盲学校の子供達が創った彫刻作品である。その中には、不思議な力強い想像力によって創られた「鳥」をテーマとした多くの作品がある。私の「鳥たちへの断章」は、この子供達の作品への感動から生まれた。私は、盲人の子供達が粘土に触ってかたちを生み出すように、音に触りながら、音楽のかたちを生み出してみようと思った。そして、鳥が飛翔するというイメージがこの音楽の根底にある。近代音楽が忘れていた音の質感、さわり、深さ、空間性といった問題をとりあげてみた。(細川俊夫)

オリジナルは、笙とフルートの為の作品であるが、今回は、アコーディオンとリコーダーによる演奏を聴いて頂きます。

◆細川俊夫(1955~):ベルリン芸術大学でユン・イサンに、フライブルク音楽大学でクラウス・フーバーに作曲を師事。ドイツ、日本を中心に国際的に活躍する日本を代表する作曲家の一人。現在、武生国際音楽祭音楽監督、東京音楽大学およびエリザベト音楽大学客員教授。

4. 伊藤美由紀:《無限のクローズアップ》(2016)(世界初演)

グレートバス・リコーダー(ソプラノ・リコーダー)、アコーディオン、エレクトロニクスの為の

今回の作品は、オーストリアの画家、建築家であるフンデルトヴァッサーの絵画《Close-up of Infinity》から着想を得ている。昨年、ドイツのマグデブルクでの音楽祭に作曲家として招待された際に、マグデブルク中心街で、彼の建築に久しぶりに出会った。学生時代にウィーンで、始めて彼の建築物に出会い衝撃を受けて以来であり、感慨深く今回の作品テーマにつながっている。彼の作品のなかで、「スパイラル」は、生と死のシンボルであり重要な意味を持っている。そして、彼は、強烈に輝くような色彩を好み、直感的に色彩を選択していく。この鮮やかな色彩が、アコーディオンの音色を、スパイラルが、リコーダーの息を含んだ多様な音形を喚起した。また、様々な音響の交感を感じられるような絵画である。エレクトロニクス制作にあたり、本日初演して下さる鈴木俊哉さんと大田智美さんに、楽譜上の指定した数々の場所の音素材の録音協力をして頂いた。その素材をコンピュータで加工されたものが、各々のサウンドファイルとなっている。息・空気を含んだ両楽器による音響が、呼吸のように循環し、音色が変容されていく。(伊藤美由紀)

5. エマヌエーレ・カサーレ:《スタジオ2a》(2000)

バスリコーダー、アコーディオン、テープの為の

この作品を制作するにあたって、自分にとってコンピュータは、新しい音色を生み出す為の有用な装置のみならず、生楽器と相互作用するピッチのある音を生み出すための手段となった。そして、伝統的な楽器とデジタル・サウンドの間の対比となる「エレクトロ・アコースティック・カウンターポイント」についてリサーチを始めた。難解で均質な書法、幾何学的形態、敏速な反応についてのアイデアがあった。作品への私のアプローチは、フレスコバルディ、ヴィヴァルディ、アレッサンドロ・スカラッティ、ドメニコ・スカラッティ等のイタリアの古典的な作曲家たちに似たような陽気さであるということが、作品から伺えるであろう。(日本語訳:伊藤美由紀)

◆エマヌエーレ・カサーレ(1974~):イタリア人作曲家。今回の作品は、第22回入野賞受賞作品である。現在、イタリアのパレルモ音楽大学で、エレクトロ・アコースティック作品制作、サウンド・デザインを教えている。

6. ソフィア・グバイドゥーリナ:《深き淵より》(1978)

アコーディオンの為の

グバイドゥーリナはこれまでソロや室内楽、コンチェルト等、アコーディオンのための作品を数多く残しているが、1978年にロシアのバヤン奏者、フリードリヒ・リップスのために作曲されたこの「深き淵より」がアコーディオンのための初作品である。それ以来、様々なアコーディオニストに演奏・録音され、現在ではクラシック・アコーディオンの代表的な作品のひとつとなっている。グバイドゥーリナの作品の多くは宗教と深い関連性があり、ラテン語訳の聖書詩篇第130からとられている「De profundis (深き淵より)」をタイトルとした本作品も例外ではない。作品中にはアコーディオン特有の演奏技法が多く取り入れられており、この楽器の広い音域によって表される「天」と「地」、その間を繋ぐ「空気=風」、そして嘆き祈る「声」が巧みに表現されている。(大田智美)

◆ソフィア・グバイドゥーリナ(1931~):ロシア人の女性作曲家。ペレストロイカ以降、ソ連を出て西ドイツに移住。現在、ドイツを拠点に国際的に活躍している。ロシアの民族楽器であるバヤン(ロシアのポタン式アコーディオン)と西洋楽器による編成など、ユニークな編成による作品も多い。

7. ソラージュ:《煙をくすべる者達》(14世紀 フランス)

リコーダーとアコーディオン版

14世紀後半のフランスに、アルス・スブティリオルと呼ばれる特異な音楽様式が現れます。それはとても技巧的で、極度に複雑なリズムを持っていたりします。このソラージュはその作曲家の一人で、ギョーム・ド・マショーの後継者とも考えられています。この曲は、低音の3声部で半音階進行が特徴的です。600年前のフランス音楽を我々がどのように聞くのでしょうか?(鈴木俊哉)

8. 田中範康:《陰影の時》(2016) (世界初演)

テナー・リコーダー(アルト・リコーダー)、アコーディオン、エレクトロニクスの為の

リコーダーとアコーディオン、そしてエレクトロニクスという編成で書かれた作品を参考にしたいと思ってさがしたのではあるが、見付けだすことができなかった。つまり今回は、新たなサウンドを求めたのチャレンジということなのだろうが、そもそも本日の2つの楽器のアンサンブルにおいても、その実例作品は殆どなく? 音色、音量バランスなど、どのように音響世界を構築するのか、全てが未知の世界なのである。本日の作品では、20世紀以後様々に試みられた特殊奏法を意図的に最小限におさえ、リコーダー、アコーディオン共、楽器本来のもっているプリミティブな「響き」を原点とし、それに加えて、エレクトロニクス技術により作られた新たな音とのアンサンブルに活路を求めた作品である。本日演奏をしていただける名プレイヤーの鈴木さん、大田さんが、エレクトロニクスとアコースティック楽器の音像世界、そして楽器どうしの陰影の世界感をどのように表現していただけるのか、楽しみである。(田中範康)



©Guido Grugnola

鈴木俊哉 (リコーダー) ● Tosiya Suzuki, recorder

www.tosiyasuzuki.com/

愛知県西尾市出身。アムステルダム音楽院卒業。リコーダーを花岡和生、W.ファン・ハウヴェに師事。リコーダーの可能性と技術の開拓に取り組む。L.コーリ、B.ファーニホウ、L.フランチェスコニ、原田敬子、細川俊夫、伊藤弘之、野平一郎、S.シャリーノ、湯浅譲二といった作曲家たちと共同作業をおこない、彼等の作品を初演する。ウィーンモデルン、チューリッヒ新音楽の日、ガウデアムス、ダルムシュタット、秋吉台、パリの秋、武生、サントリーサマーフェスティバル等の音楽祭にソリストとして参加。欧米やアジア各地で現代奏法に関するワークショップやリサイタルを行う。国内や台湾の小中学校でも子供たちにリコーダーを教える。2014年、ニンフェールと共に、第14回佐治敬三賞を「鈴木俊哉 リコーダー リサイタル《細川俊夫ポートレート》」にて受賞。



©Ryoichi Aratani

大田智美 (アコーディオン) ● Tomomi Ota, accordion

<http://www.tomomiota.net/>

幼少の頃よりピアノを始め、10歳からアコーディオンを江森登氏に師事。デトモルト音楽大学アコーディオン教育学科、folkヴァンク音楽大学芸術家コースを経て、同大学ソリストコース・アコーディオン科を首席で卒業、ドイツ国家演奏家資格を取得。御喜美江氏に師事。またウィーン私立音楽大学でも研鑽を積む。第3回JAA国際アコーディオン・コンクール上級の部、第3位入賞。2009年夏に帰国後は、ソロや室内楽、新曲初演、オーケストラとの共演等、日本をはじめヨーロッパやアメリカなど国内外各地で演奏活動を行うかたわら、音楽大学においてのワークショップ講師に招かれるなど、特にクラシックや現代音楽の分野でのアコーディオンの普及に尽力し、この楽器の魅力と可能性を発信し続けている。



伊藤美由紀 (作曲) ● Miyuki Ito, composer

www.miyuki-ito.com

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学 (ニューヨーク) で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAM (フランス国立音響音楽研究所) にて研鑽を積む。東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン (NY)、アタック・シアター (ピッツバーグ)、愛知芸術文化センター、Sinus Ton国際音楽祭 (ベルリン) などからの作品委嘱ほか、カーネギーホール (NY)、レゾナンス音楽祭 (パリ)、ISCM世界音楽の日々 (香港)、国際電子音楽会議 (マイアミ) をはじめ、世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品発表を続けている。ニンフェール、JUMPの代表として自主企画公演を定期的に名古屋、ニューヨークを中心に展開。第10回ニンフェール公演は、第14回 (2014年) 佐治敬三賞受賞。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。『時の砂』がALCD80からリリース。



田中範康 (作曲) ● Noriyasu Tanaka, composer

国立音楽大学作曲科並びに器楽科卒業。作品は、NHK-FM、アメリカ、韓国などの放送メディアや、国内はもとより、ドイツ (ベルリン、ボン、ヴァッサーブルク)、オーストリア (ウィーン、ザルツブルク)、フランス (パリ)、北欧 (コペンハーゲン、オスロ)、ベルギー (アントワープ、ルーベン)、韓国 (ソウル、テグ、マサン)、アメリカ (ニューヨーク)、メキシコ (メキシコシティ、モレリア) の音楽祭などで、広く紹介されている。1994年、2002年にオーストリアのVMM (Vienna Modern Masters) レーベルから室内楽作品集として2枚のアルバムがリリースされているほか、2001年には韓国作曲家達と共に、詩人=李承淳氏とのコラボレーションによる韓国伝統楽器によるアンサンブル作品「暗闇」のCDリリース (韓国)、2011年には代表的な室内楽作品を収録したアルバム「田中範康作品集」 (ALCD87) が、ALMレコードよりCDリリースされた。現在、名古屋芸術大学音楽学部、同大学院音楽研究科教授。

第12回公演「ReAccord」に寄せて

ニンフェール公演では、毎回、ユニークな楽器編成、コンピュータ・テクノロジーを導入することで、音響的な発見、可能性に取り組んでいます。

今回の第12回公演では、現代音楽で、まだ使用されることが多いとは言えない楽器であるリコーダーと、アコーディオンに焦点をあてます。両楽器による二重奏の作品は、まだまだ多くはありません。まして、この編成にエレクトロニクスの加わる作品が、今までに存在するのかわかりません。ソロ作品、二重奏作品、エレクトロニクスを含んだ作品に加え、リコーダーも、ソプラノ、アルト、テナー、バス、グレート・バスの5種類を使用していますので、異なった音域の多様な特殊奏法による複雑な音色が楽しめます。

作曲家として個人的に、笙の倍音の豊かな音色に思い入れがあり、今までに笙を2回拙作に使用しており、ニンフェール公演でも企画しています。音色の類似しているアコーディオンもいつか使用したいと思っていました。鈴木さんが、アコーディオン奏者と組んで活動をしていることをきっかけに、自分が今まで取り組んだことのなかったアコーディオンに出会うことができました。また、オルガン奏者でもある田中さんが、新作においてどのようにアコーディオンを使用するのも興味深いところです。これらのことが実現できたのは、現代音楽のエキスパートであり国際的に活躍されるリコーダーの鈴木俊哉さんと、アコーディオンの大田智美さんに出会えたからです。

音色、楽器の仕組みが似ていることもあり、パイプオルガンや笙の楽器の作品をアコーディオンで演奏する事が可能であり、フルートの作品をリコーダーで演奏する事も可能です。今回のプログラムでは、石井眞木、細川俊夫の作品では、作曲家が別の楽器での演奏のために同じ作品のバージョンを、例えばII→IIbのように変えています。田中範康、伊藤美由紀による各々の新作では、音響的に複雑に加工されたエレクトロニクス (電子音響) をひとつの楽器のように扱っており、コンピュータ・テクノロジーを駆使することで、カラオケのように再生された音にあわせて演奏するのではなく、作曲家が、生演奏中に、エレクトロニクスを同時進行に再生させ音楽を構築していきます。また、田中作品では、ソフトウェアのサンプル音源を加工することでエレクトロニクスを制作し、伊藤作品では、演奏家と録音した楽器音を複数のソフトウェアで加工することでエレクトロニクスを制作しています。ロシアの民族楽器であるバヤン (ロシアのポタン式アコーディオン) に関心をもちアコーディオン作品をたくさん残しているグバイドゥーリナと、コンピュータ・ミュージックに力を入れているカサーレによる作品も、プログラムに含まれています。

戦後、テクノロジーの発展によりコンピュータの応用は、音楽の世界でも必須となっており、演奏とテクノロジーの様々な関わり方により多様な作品が生まれつつあります。音楽の無限の可能性とともに、各々の作曲家の作品に込めた思い入れを皆さんに体感していただきたいと願っています。

ニンフェール・伊藤美由紀

ニンフェアール● NymphéArt

2005年愛知県で開催された国際芸術フェスティバル参加を機に結成。ニンフェとは、フランス語の睡蓮の意味で、ギリシャ語の乙女、蛹を意味するニンフとをかけており、アールは、フランス語でアートを意味する。美しく新鮮で、将来への可能性を秘めた芸術作品を名古屋で紹介する。ヴィオラ・ダモーレとリコーダーによるニンフェアール第1回公演『古楽器の現在』から始まり、愛知県にゆかりのある作曲家、演奏家を招聘し、テクノロジーの使用、映像作家とのコラボレーション、ユニークな楽器編成など、毎回、個性的なアイデアで企画。ニンフェアール第10回公演『東洋と西洋の絃』にて、第14回佐治敬三賞(2014)を受賞。

関連事業

名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース公開講座
「リコーダーとアコーディオンの可能性を探る」

講師:リコーダー 鈴木俊哉 & アコーディオン 大田智美

日時:2016年5月26日(木) 18:00~19:45

場所:名古屋芸術大学東キャンパス 2号館大アンサンブル室

主催:名古屋芸術大学、愛知県芸術劇場(公益財団法人愛知県文化振興事業団)

【スタッフ】

舞台監督:井戸亜由巳*

照明:平博章(金井大道具NAGOYA JV)

録音:岡野憲右(ザ・イヤーズ)

録音:長江和哉

テクニカル・アシスタント:磯村輝昭

制作:藤井明子* 吉安恵子*

*愛知県芸術劇場

主催: 愛知県芸術劇場

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター内
TEL052-971-5609 (10:00-18:00) event@aaf.or.jp

ニンフェアール nymphheart@yahoo.co.jp